

松山藩お抱え能役者の子孫で、1970年代後半以降、京都から月に1、2度松山市を訪れ、若年層を中心に能楽普及に力を注いで35年目を迎えた。2010年4月、15年ぶりの東雲能復活にも協力し、世阿弥の名作「高砂」で優雅な舞を披露。役者としても県内との関わりが深い。これまでの取り組みと成果、今後の課題は。

(聞き手・吉岡耕太)

なぜ松山だったのか。

宇高家は1712年、宇高六兵衛信政が初代の松山藩お抱え能役者となり、1871年の廃藩置県まで代々続いた。自分は初代から数えて7代目に当たる。先祖が松山で積み上げてきた歴史や文化を子孫が継承するのは義務と考えている。

30歳のころ、ルーツがある松山市に稽古場が欲しいと思う、「松山景雲会」(同市山越4丁目)

キーパーソン

Key Person

愛媛での能楽普及に尽力し35年目のシテ方金剛流能楽師

宇高 通成さん(64)



うだか・みちしげ 1947年京都府生まれ。6歳で初舞台、12歳から22歳まで宗家・金剛巖に師事。70年に独立。重要無形文化財総合指定保持者。主な演目は「翁」「道成寺」や新作能「子規」など。

を設立した。

しかった。

今まで教えたのは主に

さらに、若者の愛好者を増やさないと能楽の未来はないと危機感を持ち、松山商科大学(現・松山大学)の学生に能楽サークルの設立を働きかけた。そして1978年、学生8人による「能楽研究会」がスタート。翌年には愛媛大学にもでき、両大学の18人が合同で稽古するようになった。

若手ファン獲得が課題

「能楽研究会」がスタート。

み込まれている—といったことだ。

ただ、近年は能楽を始める学生が減り、焦りを感じている。97年に松山大の能楽研究会が活動をやめ、愛媛大のメンバーも当初より減った。

学生たちにシテ方の初步的な謡や仕舞の見本を示して、手取り足取り教えてきた。未経験の学生たちの上達を見るのが楽しい。

指導の成果や現状は。

松山市内の児童、生徒を

は、三役を東京などから呼ばないといけない。その分、経費がかさみ、公演の実施が困難になり、能楽鑑賞の機会も少なくなるだろう。流派を超えて行政の力も借りながら、三役育成をしていくつもりだ。

狂言方、はやし

方の人材育成が進んでいない。能楽公演に

私は能楽師であり、能面師も兼ねている。愛媛でも能面制作のアマチュアグループが増えているそうだが、内輪で鑑賞し合うだけでは上達しない。能楽と能面の専門家がきちんと評価する能面制作コンクールを、年に1回でも開けないかと考えている。

愛媛ではプロの能楽公演に出演できる実力を持った能楽三役(ワキ方、